

人には棒振蟲同然に思はれ（井原西鶴）

元祿の江戸は上野の人混みの中を、遊び仲間の三人が連れ立つて歩いてみると、名高い金魚屋があつて、立派な金魚が五兩六兩で買はれて行く。流石は江戸と感心してゐると、見窄らしい身形の男が金魚の餌の棒振蟲を賣りに來た。一日中取り集めても二十五文にしかならないが、それで何とか妻子を養つてゐるのだ。「かなしく世をおくれる人」もあるものだと思つて男を見ると、何と、昔遊里で一緒に遊んだ、かつての御大盡の利左衛門ではないか。三人が憐れに思つて、貧しくとも氣樂に暮せる様にしてやりたいと申し出ると、利左衛門は「女郎買の行すへ、かくなるならひなれば、さのみ恥かしき事もあらず」、「御合力はうけまじ」とてきつぱり斷り、近くの茶屋でなけなしの二十五文の錢を投げ出し、茶碗酒を奢らうと云ふ。

それなら利左衛門の家で酒を飲まうと、皆であばら屋に押掛けると、昔は吉原で有名だった女郎が妻になつてゐて迎へに出るが、客の一人については、家に入るのを遠慮して貰ひたいと

云ふ。譯を問はれて、女郎の頃一度だけ情を交した事があり、それを「あるじにかくす」のはよからぬ事と思ふからと云つてさめざめと泣く。利左衛門は妻の殊勝な心遣ひを嬉しく思ひつつも、自分の客だからとて三人とも招じ入れ、まづはお茶を、と云ふが、薪がなく、佛壇の扉が外れてゐるのを幸ひ、菜刀で打割つて焚付たきつけにする。幼い一人息子は、丸裸でつきはぎだらけの蒲團に巻かれながら、溝に落ちて着物を濡らしたが着替へが無いので乾く迄裸でゐるのだと云つて泣く。

客達は子供が不憫ふびんでならず、歸り際に持合せの金を出し合ひ、天目茶碗てんもくぢやわんにそつと入れて家を出るが、やがて利左衛門が追つて来て、「筋なき金をもらふべき子細なし」とて、投げ棄てて歸つて行く。仕方無く、二三日後、人を遣はして妻に金を届けさせると、家は空家になつてゐて、親子の行方も知れない。三人は、「おもへば女郎ぐるひもまよひの種」と思ひ定めて、女郎買ひを止めて了ふ。その結果、女郎が三人大損する事になつたといふ。

西鶴の遺作「置土産おきみやげ」中の一編である。御大盡からぼうふら賣りに轉落した利左衛門は愚かしいと云へば愚かしいが、さういふ彼を西鶴は嗤わらつてゐる譯でも裁いてゐる譯でもない。寧ろさうして身を落しながらも、誇りや心遣ひを忘れまいとする夫婦の哀しくも健氣な姿を同情を

籠めて、それでゐて些かも感傷に溺れる事無く描いてゐる。

西鶴にはよく解つてゐたのだ、哀しくも愚かしいのが人間の常であり、百八煩惱の塊たる我々人間にとつては、女郎狂ひに限らず、「まよひの種」は生涯盡きる事がない、といふ事を。さういふ人間通西鶴を證す例は枚舉まいきよに暇いとまが無いが、やはり「置土産」に彼は書く、死罪となつて「首はねらるゝ者も、その日の朝食箸もつてくふは、人の命ほどおしき物はなし」。又「好色五人女」にはかうある、「人の身ほどあさましくつれなき物はなし。世間に心を留めて見るに、いまだいたひさかり盛の子をうしなひ、又は末末永く契ちぎりを籠し妻の若死、かゝる哀れを見し時は、即座に命を捨てんと我も人もおもひしが、泪なみだの中にもはや欲といふ物つたなし」。つたなし、見苦しい、といふのだ。如何にも「人は化け物」と云ひ放つた男らしい鋭い人間觀察だが、利左衛門夫妻が示してゐる様に、それだけで人間が割切れるものでもない。眞山青果が書いてゐる、「日本の過去の作者のうち、西鶴ほど眞實を尊重して小説を書いた人もあるまい。言葉が強めて云へば、彼は眞實以外に何事をも描き得ない人であつた」。決して過言ではないと私は思ふ。

(新日本古典文學大系七十七、岩波書店)